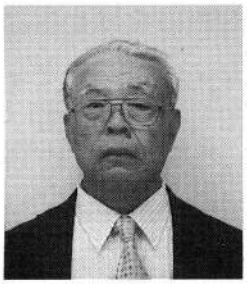
藤沢地名の会

30年のあゆみ



ご 挨 拶

藤沢地名の会
会長　鈴木富雄

藤沢地名の会が昭和６０年6月１５日産声をあげてから、ここに３０周年を迎えることができました。

地名の会誕生に際しては、昭和５８年から３年の歳月をかけて藤沢市が日本地名研究所に委託して行われた地名調査に多くのボランティアの方々並びに専門分野から参画・調査し、暖かく指導、支援をしてくださった方々なくしては現在はありません。深く感謝いたします。

この地名調査の成果は「藤沢の地名」として昭和６２年３月藤沢市より発刊され、当会員の座右の書として活用され、市民の皆様にも愛され、平成９年３月には第３版が刊行されました。

現在３０周年という大きな節目を迎えましたが、藤沢市の地名を通じて「藤沢の考古・歴史・地理・民族等を調べ後世に伝える」という基本理念は、現在まで踏襲してきたことであります。

多くの先達の知恵を借り、またご指導を受けながら３０周年を迎えることが出来ました。これは理解ある市当局と市民に支えられてきたことに改めて感謝いたします。

また藤沢地名の会の基本理念を維持・発展させ、大きな役割を果たしているのが会の部会活動であります。多くの部会活動が会員の努力により会の活性化に長くつながっていることに感謝いたします。よい伝統は守りながらも組織運営を時代に適応するように、全会員の力で果敢に刷新していくべき年であります。今日までのご協力を感謝いたしますと共に、今後のご尽力をお願い申し上げてあいさつとします。

祝 い

藤沢市長　鈴木恒夫

藤沢の地域文化の発展に大きな役割を果たしてこられた「藤沢地名の会」が、創立３０周年を迎えらえたことを、心よりお祝い申しあげます。あわせまして、「藤沢地名の会３０年のあゆみ」の発刊を、心からお喜び申しあげます。

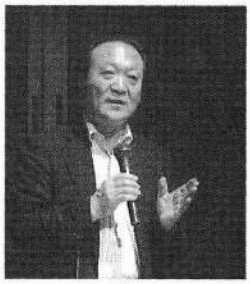
会員の皆様には、長きにわたり地名に関する講演会や会報の発行、古文書部会、地誌輪読会などの事業を通じ、地名研究に積極的に取り組まれ、多くの成果をあげてこられたことに、深く敬意を表するものであります。

藤沢市民は、美しい湘南海岸に面し、世界文化遺産富士山も望むことができる気候温暖で住みや

すいまちです。また、江戸時代には、東海道五十三次の６番目の宿場町としてにぎわいを見せるとともに、江の島は、浮世絵にも多く描かれた風光明媚な景勝地として栄え、歴史と文化のみなぎるまちでもあります。現在では、年間観光客数が 1700 万人を超える観光都市としてしたしまれています。

本市では、「郷土愛あふれる藤沢～松風に人の和うるわし、湘南の元気都市」の実現を目指すまちづくりの中で、市民の皆様に、自分のまちにもっと愛着をもってもらう、そして藤沢の魅力を市内外により広く発信するため、「ふじさわシティプロモーション」を進めております。地名は自分自身やその土地のルーツを示すもので、地史をひもとく糸口であり、郷土愛の向上にもつながるものと考えております。地域の歴史や文化に対する市民の関心は高く、今後とも、地域に根ざした活動が継続されますことを期待いたしております。

この創立３０周年を契機とされ、「藤沢地名の会」のますますのご発展と、会員の皆様のご活躍を祈念いたしまして、お祝の言葉といたします。



これからの１０年が勝負

日本地名研究所長　谷川彰英

「藤沢地名の会」３０周年おめでとうございます。昭和６２年に『藤沢の地名』は日本地名研究所編として出されたもので、全国の地名調査の先駆けをなすものでした。それ以外にも、講演会や地名探訪など多彩な活動を続けてこられました。心から敬意を表します。全国多数ある地名研究会の中でも屈指の成果を挙げております。

しかし、勝負はこれからの１０年です。この１０年をどう乗り切れるかに地名研究はかかっています。どの研究会も会員の高齢化の波に追われ、事実上活動停止状態の研究会もいくつかあります。どうしたら若い世代に繋げていけるかを真剣に考える必要があります。そして、全国の地名の動向に眼を向けることが必要です。地名研究はとかく自分たちの地域に閉じこもりがちですが、実は地域の地名は全国的な動向をつかんでこそ解明できるものです。どうぞ、今後も日本地名研究所との連携を深めて地名研究を促進していただくよう、期待しております。

貴会の益々のご発展をお祈りいたします。

目　　次

３０年のあゆみ―記録を中心として―

あ い さ つ　　藤沢地名の会　会長　鈴 木 富 雄……1

祝　　辞　　藤 沢 市 長　　鈴 木 恒 夫……1

日本地名研究所　所長　谷 川 彰 英……2

30 年の経過報告と将来展望……4

藤沢地名の会関連年表……7

30 年の活動の記録……9

活動の記録（推移と現況）

（1）　地名探訪……56

（2）　地誌輪読会……57

（3）　地名講演会……58

（4）　会員研究発表会……59

（5）　地名の会会報……60

（6）「藤沢の地名」を読み訪ねる会……61

（7）　古文書部会の活動……62

（8）「ミニだより」編集を担当して……63

（9）　地名映画会の実績と展望……64

（10）「特別企画」の今までとこれから……66

スナップ写真にみる活動の記録……67

藤沢地名の会会則……69

藤沢地名の会役員歴任表……70

平成 27 年度運営委員（創立 30 周年実行委員）……75

＜編集後記＞

30年の足取りと今後の展望

「藤沢地名の会」とは、発起の時から「誰もが何時でも気軽に参加出来る雰囲気をもって運営を図る」という趣旨の組織を目指し、多くの既存団体に見られる「地名研究」の言葉を避けた名称となっています。

当会は、昭和60年6月15日第1回総会をもって発足しました。当初の会員数は98名とのことですが、平成3年には200名を超え6年目にして倍増を果たし、全国でも有数の「地名」を名乗る会となりました。

会の趣旨にもとづく諸先輩の運営努力の賜物であり、当会の強固な基盤が早くも構築されました。

そもそも当会の成り立ちは、昭和58年から足掛け3年の歳月をかけて藤沢市が実施した藤沢の地名調査にボランティアとして参画し調査に携わった藤沢市民の中から、有志が語らい調査の終了を契機に誕生したものであります。調査で得た貴重な経験と知識を生かし、更に継続して市内における地名への関心を高めることを目的としました。地名を大切にすることは、郷土への誇りと愛着を喚起することにもなります。

実際の地名調査は、藤沢市が日本地名研究所（谷川健一所長）に業務委託して行われました。参加したボランティアの人々は２５０名を超え、一から調査の方法の指導を受けて市内を悉皆調査した成果が、日本地名研究所編「藤沢の地名」として昭和62年3月藤沢市により発行されました。当会会員にとって「座右の書」であり、３００ページにも及ぶ本格的な調査結果で浮き彫りにされた地名には、地形に始まり、生活、民俗、文化、信仰から歴史、考古などなど極めて多岐にわたる要素が織り込まれており、奥行きの深さが尽きません。それだけ地名にかかわる当会の活動分野が広範に求められていることにもなると云えましょう。

設立総会のあと、記念講演会が当会顧問伊倉退蔵横浜国立大学教授により「大地名について」と題し開催されました。更に同年内に、2回の講演会を実施しております。まだ資金も儘ならぬ最初から、いずれもその道の大家を外部講師として招く事が出来ましたことには、実は藤沢市と日本地名研究所の並々ならぬご支援とご協力を頂いたことによります。当時神奈川県から事業委託を受けられていた日本地名研究所は当会を県民講座の共催として、講師の派遣をして頂き、また時には藤沢市が共催となり講師料を引き受けて頂くことで、質の高い講演会を続けることが出来ました。現在も講演会は藤沢市からの委託事業として年2回開催し、当会の主要事業の一つとなっております。そして殆どの講演内容はその要旨を「藤沢地名の会会報」に順次掲載し、会員はじめ、市内図書館、公民館、学校などに配布することで、講演会に参加できなかった人々にも広く知ってもらえるように努めております。年3回発行の「会報」も当会発足初年度の9月から続けられており、貴重な記録を残し、広く周知を図る中心的事業となっております。今は、バックナンバーも会員向けのみですが、当会ホームページを通して、閲覧、印刷することができます。

発足初年度から開始され、やはり当会の主要事業の一翼を担っているのが、実際に市内を探訪し現場考証をする「地名探訪」です。第1回探訪は昭和６０年8月「大庭城址周辺」から始められました。日本地名研究所との共催で藤沢市の後援を得ており、「例会」として公募による一般参加者も受け入れて行いました。藤沢市内全域をほぼ行政区域毎にめぐり約5年で一巡する企画であります。従って5年以上在籍の会員にとっては、二巡目になると魅力半減となりかねない問題もありますが、新規会員には常時一巡の機会が欠かせないことから、工夫を凝らしながら継続しており、特に参加者に都度配付する資料作成には、精根を尽くし、どこに出しても遜色のないものを目指しております。

昭和63年9月には始めての「映画会」が開催されました。今でも湘南台にある藤沢市総合市民図書館の視聴覚ホールを会場に「例会」として一般参加者も募り年1回開催しております。市保管、県保管の映像など、消え去った昔の風景、風習などの記録された貴重な資料を公開する数少ない場としております。

「『藤沢の地名』を読むつどい」が同じ昭和63年の11月に始められました。会員の「座右の書」とはいえなかなか通して読む機会のない会員向けの会と云うに留まらず、情報交換の場として多くの話題が語られるきっかけとなりました。この会は8年の歳月をかけて平成12年に終了しましたが、引き続き第2回目が開始され、ほぼ毎月開催することで平成14年に読み終えています。そしてこの読むつどいは発展し、平成17年から「『藤沢の地名』をよみ訪ねる会」として、1地域を読み終わるごとに実施踏査する会を始めました。「地名探訪」では、廻りきれない場所を多く取り入れ原則月1回開催し、より地名に迫る会となりました。平成21年3月第43回を以て完了しますが、引き続き5月より「『藤沢の地名』を読み訪ねる会Ⅱ」が始められました。読むだけでは実感のわかない市内の地名になじむ良い機会であります。平成25年7月これも一巡し終了すると、9月からは視野を市外に広げた「さがみ探訪」として引き継ぎ、県内史蹟・古道などを中心に原則毎月実行しております。毎月のことで準備も大変ですが、「地名探訪」と異なり資料作成は簡素化し、会員が気軽に参加出来、市外から藤沢をみる良い機会としても会員の支持が多く定着しました。

視野を市外に広げた事業としては、平成12年から「特別企画」を開始しております。「地名探訪」を一巡した会員が増えるに従い、要望により近隣市町村の旧跡、祭事見物等を「特別企画」と称して訪ねています。平成１８年にバス一台を借り切り1日コースを巡るバスツアーを開催すると、大好評を博し年2回実施する年もありました。会員の高齢化にも適応した企画であると共に、単独では廻りにくい特別なコース設定の工夫が人気を得ている大きな要因のようです。

これらは全て、運営委員により運営されるものですが、会員による活動の場として、昭和６２年3月に「会員研究発表」が「例会」として藤沢市の後援を得て行われています。翌年も実施されましたが、一旦休止ののち平成3年2月から「会員研究発表シリーズ」として再開され今日まで継続されています。また「古文書部会」「地誌輪読会」も分科会として実質会員が主体となり教材が選ばれ、運営が行われております。

地名の会として特筆すべき企画「藤沢を語り合う集い」を、平成9年1月から16年12月までの8年間にわたり実施しました。地名への市民の関心を一層広げる目的を含めて、市内全域を１２地区に分け、各地区における昔を知る古老や郷土史家を招いて地名の変遷や年中行事、風習などの話を聞く会を開きました。大切な資料や無形文化遺産の披露などもあり、一部は会報にも掲載され、本会の貴重な財産と云えます。

情報伝達手段として、平成元年に「ミニだより」第1号を発行しました。当会第3代会長湯山学氏就任を機に会員のご意見・各種催事の情報伝達・地名に関するニュース紹介などを目的としたもので、「会報」の合間の時期に発行しております。また、平成20年には、ほぼ1年の検討期間を経て待望の「藤沢地名の会公式ホームページ」を開設し、平成23年からはメルマガを会員向けに発信し始めました。平成27年3月には会員の約半数をしめる８０名の方々が、アドレスを登録しメルマガの配信を受けており、行事の天候による延期情報など実用価値の高いものとなっています。

40周年に向けて

30年の経緯を見ますと、当会設立に深く携わり初代会長に就任頂きました広田三郎氏が発足後1カ月の間もなく逝去され、また当会の実質的な運営を切り回し、飛躍的な発展の原動力となっていた第2代会長久保尚雄氏は昭和63年10月に亡くなるなど不幸があり、さらに平成22年10月には第5代会長服部忠幸氏も志半ばにして逝去されました。しかしその遺志は引き継がれ、現在は第7代目会長鈴木富雄氏のもと30周年を迎えることができました。課題もあります。主要事業の大半が当会発足から10年以内に定着しており、マンネリ化の危険を孕んでいると云えます。会員数約180名はピークに比し20%程減少しております。平成26年度当会開催の行事に全く参加されていない情報手段のみを接点としております会員の方が約4分の1を占めております。次なる40周年にむけて次の運営基本方針を立てました。

1．本会の魅力度向上
会員数の減少と高齢化が進む中で、若い方に魅力ある地名の会に変わることが喫緊の課題です。参加意欲の湧く講演会・地名探訪等、会員であるが故に得られる情報、会員の交流の活性化が求められる。

2．部門活動の更なる活性化
各事業部門活動が本会の基盤であり、この更なる活性化を図ります。歴史、地理、民俗，考古等幅広い領域を内包する本会は会員が積極的に事業に参画し、自らが学習した成果等を市民の場に供し、市民の学びに貢献できるように推進する・

3．会員に対する情報サービスの向上
会員に対する情報提供として会報、ミニだより、ホームページがあるが、これらについて継続すると同時に、若い年齢層の方々が参加できるような企画を立てるなど会員の増加に努める。

4．財政の安定を図る
会員数の減少、消費税率アップの影響とも連動する年会費の変更など必要な改定に取り組む必要がある。

記念誌「10年のあゆみ」

記念誌「20年のあゆみ」

平成二十七年十月　藤沢地名の会